

令和5年度 学内競争的資金採否一覧

令和5年3月31日

「社会貢献プロジェクト」(1/23WEB申請締切 MSC(組織)として複数案件申請の場合はセンター長にて取りまとめ

件名	MSC申請者	申請額(千円)	採否	採択額(千円)	概要
タイプB MSC 構内自然観察会および市民に開かれた植物標本庫のための環境整備とボランティア人材育成	山中史江	500	否		菅平高原実験所では社会貢献活動の一環として、約10年前よりフィールドを使った自然観察会を年3回実施し、また、令和4年度には植物標本庫について一般市民の利用促進に向けた計画を始動している。観察会や標本庫の活動にあたってはボランティアスタッフであるナチュラリストの協力を受けており、彼らにはその他にも多岐にわたる社会貢献活動をサポートいただいている。本事業では、観察会および標本庫の環境整備と合わせてナチュラリストの人材育成を図ることで、実験所を核とした広範囲における自然科学の振興を目指す。

「生命環境系長、生命地球科学研究群長・生命環境科学研究科長裁量経費」(7/7支援室申請締切)

件名	MSC申請者	申請額(千円)	採否	採択額(千円)	概要
山岳科学センター菅平高原実験所の研究教育用顕微鏡システムの補強	津村義彦	417	採	98	菅平高原実験所では、年間20件を越える学内外の学生実習を実施しており、R4年度は延べ2589人の利用があったが、その半数近くの実習で顕微鏡を利用した。また約30年前より毎年実施している菌類分類学のワークショップ、大型研究プログラムのワークショップ、学会関連の土壌動物ワークショップ等でも顕微鏡が必要不可欠である。実体顕微鏡と光学顕微鏡を約40台ずつ良好な状態で維持して外部利用も許可している研究教育機関は少なく内外の利用者から大変重宝されてきた。コロナ期間中は利用者数の制限もあったが次第に平常化する中で、老朽化等の原因で使用できなくなった顕微鏡が多く、その補充が強く望まれている。新規実体顕微鏡の補充をするとともに、新たに照明機器の追加導入により旧型機器の復活利用も行う。学内外の実習のクオリティを維持しつつより教育効果が発揮されること、また、各種ワークショップを更に活発に実施して、生物多様性、生態学の研究活動を振興し、その拠点としての任務を果たすことが期待される。近年では、学生の教育、研究者の利用に加えて、実験所の公式ボランティアとして活動をサポートしてもらっている地域住民(菅平ナチュラリストの会)の活動にも多いに有効活用されており、顕微鏡機器の充実は、地域の博物館的機能を果たす実験所の、生涯教育面にも大きな効果をもたらすものと期待できる。
山岳科学センター菅平高原実験所における植物標本庫整備	津村義彦	356	採	356	菅平高原実験所では約80年前より、植物、地衣類、菌類、昆虫など様々な生物の標本の収集を開始している。これら標本は種の分布、形態変異評価試料あるいは遺伝解析試料として、昨今その重要性が再認識されている生物多様性およびそのデータベースを構築する上で、非常に貴重な研究教育資源といえる。実際に菅平高原実験所に常駐する学類生、大学院生はこれら標本を研究に利用している。さらに最近ではこれら情報を社会と共有すべく、これまでに10480点の標本を全国の科学系博物館の協力の基に国立科学博物館が運営するポータルサイトS-net(サイエンスミュージアムネット)に登録し、世界に向けて情報を公開した。これら標本データの一部は、地球規模生物多様性情報機構(GBIF)ともリンクしている。また、これら標本は菅平高原実験所が社会貢献活等として行っている一般市民で構成される“菅平ナチュラリストの会”の活動や、一般市民を対象にした毎年3回実施している自然観察会などにも活用されている。さらに長野県植物誌改定委員会より約8800点の植物標本寄贈を受けるなど、これら標本は年々拡充している。しかし、現状では保管スペースがなく、約6000点の標本が山積み状態になっている。そのため、利用者が目的の標本にアクセスしにくく、また取り出す際に他の多くの標本を移動させなければならないため破損のリスクも増し、大きな問題となっている。そこで本事業により、標本庫を整備することで、生物多様性科学の根幹をなす植物標本を適正に保管・管理できるようにし、山岳科学センターの研究教育資源の向上を図る。

「戦略イニシアティブ(A)」

件名	MSC申請者	申請額(千円)	採否	採択額(千円)	概要
R3(重点育成研究拠点)	津村義彦	3,800	採	3,800	山岳科学センターは全国級研究拠点を目指して、山岳生態系のITを用いた自動観察システムの基盤整備を行い、国内外の利用者の利便性を図っていく予定である。また国内だけでなく国際的にもネットワークを強化して山岳科学センターの知名度を上げていき、国際共同研究を企画して行く。また国内では屈指の山岳領域として「山理解領域」、「山管理領域」、「山活用領域」における分子生態学の拠点を形成していく。